

N24
1
93E17

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



1994

1



子どもの発達相談 —園と家庭の連携のために—



園と家庭の連携は子どもの発達を正しく理解することからはじまります。そのためのハンドブック。

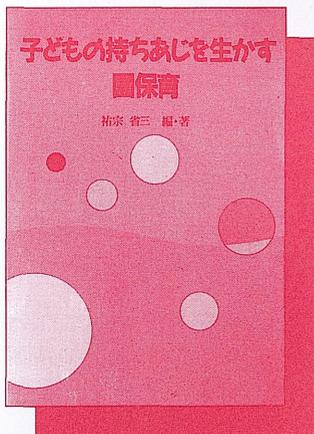
園の先生と、親とが子どもの育つ姿を正しくとらえ、理解することは保育の第一歩。90項目のポイントに分かりやすく丁寧な解説をつけた子どもの発達相談です。先生ばかりでなく、親にもすすめて、ともに読み合うこともできる幅広さをもった育児ガイドブックです。



柴崎 正行・著

A5判・240頁・定価1,800円(税込)

子どもの持ちあじを生かす園保育



一人ひとりの持ちあじを生かす園保育の考え方から実践まで。

早いけれど荒っぽいものを作る子、遅いけれどきちんと作る子など、いろいろな持ちあじの子の実践例を集めて、指導の基本をまとめた本です。

個性を育てる保育に悩んでおられる先生方におすすめします。

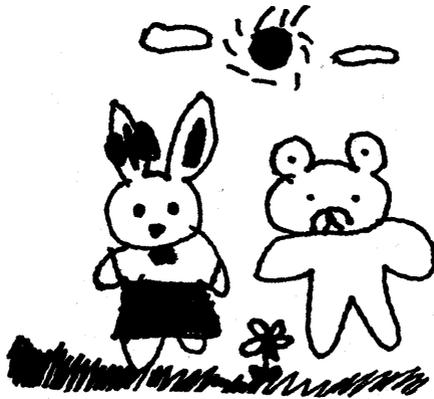


祐宗省三 編・著

A5判・240頁・定価1,700円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼 児 の 教 育



第93卷 第1号

幼 児 の 教 育 目 次
——第九十三卷 第一号——

© 1994
日本幼稚園協会

へ巻頭言▽子供に支えられる大人……………宮澤 康人…(4)

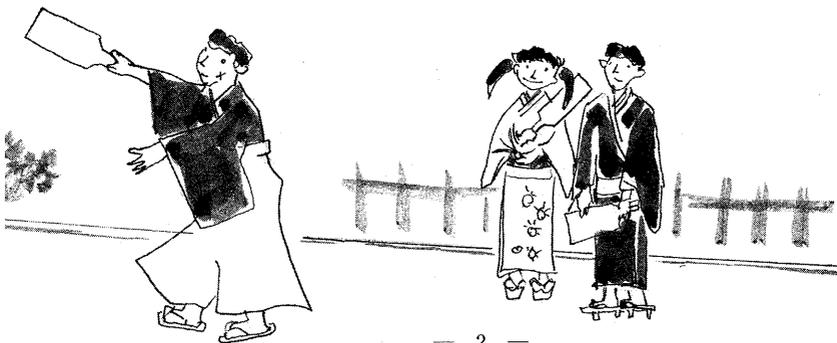
保育は身体的行為でありながら知的行為である……………津守 真…(8)

「遊び」を身体からだに刻み込む教育……………清水 諭…(11)

私の子ども時代(1)

生い立ちの記……………牛島 義友…(20)

ペスタロッチーと幼児教育……………鈴木由美子…(24)



食と文化 素材・嗜好・料理……………島田 淳子…(32)

倉橋惣三「保育法」余聞(3)

保育者の自意識 良寛と布袋和尚……………土屋 とく…(38)

Eさんへ……………青木 章子…(47)

ある日の育児日記から(37)……………佐藤 和代…(54)

堀合先生に学ぶ(10)……………上垣内伸子…(55)

表紙・梅田 なほ／扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田代 和美

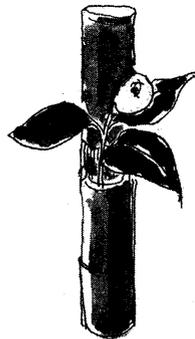
榊田 正子・田中三保子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



子供に支えられる大人

宮澤 康人



強い者が弱い者を支えるのはふつうのことだが、その逆に、弱い者が強い者を支えることはありうるだろうか。西洋の近代になって現れた子供観の中にはそれに当たるものがあるように思う。

かねてから私は、大人と子供の関係が歴史的にどう変化してきたかというテーマに関心をもっているが、日本と西洋の伝統的子供観は、しばしば「植物栽培モデル」と「家畜訓練モデル」と要約される。日本の子育ては、子供を作物のようにみなして、作物のまわりの雑草を除いてやるとか、日当たりを良くしてやるといふ風に、対象には直接働きかけないで環境を整えてやる方式であった。それと対照的に西洋のは、手におえない野性の動物を飼いならして従順な家畜にするように、子供にムチを加えて訓練する方式である。ム

子を惜しむと犬と子供はだめになる」という諺が西洋にはある。

それだから一六世紀に日本を訪れた一人の西洋人は、日本の子供が大切に可愛がられている様子を驚きの目をもって旅行記に記している。西洋では、一八世紀に至るまで、中流以上の階層の子供でさえ、今日の言葉でいえば児童虐待ともみられるほど苛酷なしつけを受けていた。「子供時代の歴史は、まるで悪夢のようであった」と、西洋の子供観の歴史を書いたドゥモースは言う（『親子関係の進化』海鳴社）。

そのような背景があるため、近代以降も西洋のしつけは厳しい。日本のように子供を甘やかさないといわれている。ところが一方では、それとは反対ともみえる心情が表れる。一八世紀のフランスの父親で、將軍でもあった一人の男は、妻にあてた手紙の中で、次のようなことを書いている。

「望んでいたような教育を子供たちにしてあげることができないという痛みが心の中をよぎって、しばらくの間とても辛い思いをしました。……私は自分の子供たちが同年齢の同じ身分のよその子供たちと同じ水準にあるのを見るためならば、もし他に何も持っていないとしたら、私の最後の上着の果てまで売るつもりです。」

ここには、孤立化する近代家族の中のわが子意識とか、いとしい子供のために「献身したい」という親の心情と解されるものが表れている。これと似た子供への思い入れは、子供を描いた絵画、児童文学、その他いたるところにみられる。

このような子供観の出現はどのように説明できるだろうか。それについては諸説があり、先のドゥモースの本にもその紹介がある。もちろんいろいろな理由が考えられるが、少なくともそこには、子供という弱者を保護する立場に身を置くことで、親や大人が自身自身の存在理由を信じたという願望が働いていることは確かであろう。

近代社会に生きる親や大人は、大家族や村落共同体や教会などから解放されて、自由になった反面で、ひどく心細い存在にもなった。それなのに、自分よりも弱者である子供に頼られると、精一杯に強者の役割を演じなくてはならない。しかもそうすることで辛うじて強く生きられるということもある。心の支えとなるものを次々と失ってきた近代人には、何か献身できる対象がほしい。その渇きにも似た気持ちで選んだのが、か弱いがゆえに自分を頼りにしてくれる子供であった。

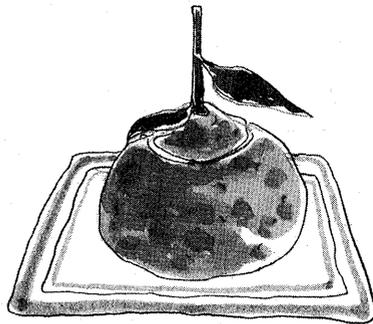
しかしこのような子供観には両義性がある。大人にとって子離れを難しくするだけではない。子供をいつまでも弱くて可愛いままにとどめておきたいとか、子供の必要に先廻りしてあれもこれも過剰に与えたいといった形をとって、子供を苦しめる原因にもなりかねない。

(放送大学)

保育は

身体的行為でありながら 知的行為である

津守 真



保育の実践に慣れてくると、いつのまにか、気を抜いて保育の場に出ている自分自身に気付かされることがある。子どもとの交わりが浅くなっている。それではいけないと思いついて、謙虚な気持ちになって保育に向かう。そして保育の実践の原点を思い起こす。

子どもとかかわっている「いま」を深めら

れるように、自分の意識を変える。

自分にとってかかわりにくい子どもや、いま大変な思いで毎日を過ごしている親と、本気に向き合う。

意味も分からぬままに、子どもと応答して疲れる身体の行為そのものの中に、知性の源があることを信じて交わる。

具体的な出会いはさまざまである。

普段つきあいの薄くなっている子どもの傍に腰をおろす。自分の傍にゆっくりといてくれると思うと子どもは思いがけない姿を私に見せてくれる。近頃この子はこんなことを考えていたのかと私は気付かされる。その気になつてわきにいると、時間は短くとも、何と多くが見えることか。

長い年月、水遊びばかりやっているように見える子どもの、その遊び方が以前とはまるで違っていることを発見する。ホースで水をかけながら大声を出す。白ねんどの塊りにホースの水を噴出させて粉々にするが、その声だけでねんどが破壊されそうな迫力がある。他の子がホースに手をふれただけで、逃げていた時とは、大違いである。コンクリートのへりに水をあてて土を削る。そうかと思ふとゆるやかに水を出しておおらかな笑いを

見せる。土をくずす。いくらでも毎日やることがある。この子とかかわっていると、私もまた同じ職場に毎日出かけて、十年以上も同じようなことを考えつづけているのに似ていると思う。同じ遊びにこだわると言われながら、これだけ継続する熱意は貴重である。

数日間お腹をこわして休んでいた子どもが久しぶりに登園する。家で冷蔵庫からジュースを出して飲むので、うすめると怒り、それをめぐる母と子の間の戦いでへとへとだと母親は訴える。家庭の夕方の情景が目には浮かぶ。こういう時も、そのひとつひとつのかかわりの質を良くすることを考えてつきあうよりほかないだろう。話の間、その子は私の膝にもたれたり、そこらをうろろしている。この頃熱中する遊びがなくなったみたいで、いまは何も見つけられなくてぶらぶらしてい

ることが多いと母親は言う。私は、それなら
丁度、本当にやりたいことにゆきあたること
を求めているこの時を大切にしなければと、
一生懸命考えて話す。何を話すかというより
も、母親との対話のその時が大切なのだと思
う。

抱いてくれと毎日要求する子どもが来た。

私はこういうときにはすぐに応じることにし
ている。折があつたら早く床におろそうとい
う意識をもちながら抱いていたら、その
「時」には内容がなくなってしまうだろう。

この時は、一緒に親してみたのしむ時という風
に意識を変えると、抱いているその時はわか
わりの貴重なひとこまとなる。実際、そうす
ると発見がいくつもある。騒音がつづくとな
作を起こすことのあるこの子が選ぶ場所は、
静かな空間であることが多い。また、私に頼

めばいつも抱いてくれるという安心感が、こ
の子の一日の生活を安定させているかもしれ
ない。抱かれることが毎日のたのしみのひと
つとなつているとすれば、そういうたのしみ
を子どもに与える者になり得ているとは、保
育者は幸いである。

庭の高い所が上がっている子どもがいる。

落ちたら大変と下から見ている間に、その子
はしっかりと綱を握っていることに気が付い
た。それだけしっかりと綱をつかまえている
のは、自分の意志力で大人の手の届かない場
所を選んでいるに違いない。その子は地面の
日常生活の空間では疎外感を経験することが
多いからではないか。日頃困ることを次々に
するその子の傍にゆくことを私もつい避ける
ことがある。障害児と言われ、言葉を話さな
いと言われて、本当に自分の価値を認めても

らえない寂しさを感じることも少なくないだろう。そう思うと、高い所に上るからと言って、危いから気を付けてと声をかけるだけでは済まない。その場で一生懸命考えて、親しみを通わせるようなことばをさがす。高い所から下りた後もその子と一緒に遊ぶ。そうしている、いつも走って移動する子どももがいつのまにか私の手につかまっている。

一日の保育を終えて、何と多くのことをしたかと思う。しかしふり返ってみると、何をしたのか、いちいち思い出せない。しばらく経つ間に、次第にここに記したようなことが思い出されてくる。保育の最中は、ひたす

ら、出会う子どもの側に身をおいて、そこで必要とされることに応えて動いている。この点で、保育者の生活は、極度に他者のことを考えて動く生活である。普通の生活でも、他人を配慮することは多いが、保育はその極にある行為と言えよう。

私共は、保育することをもっと大切に、尊重しなければいけないと思う。他者の側に立って動くのには、体力のみでなく、自分の向きを変える意志を必要とする。そのとき、自分は他者に対して相対化される。自分を絶対化するときは知性は失われる。保育は身体的行為でありながら知的行為である。

(愛育養護学校)

「遊び」を身体からだに刻み込む教育

清水 論

一、「遊ぶ子供の声」

遊びをせんとや生れけむ、戯たはぶれせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動ゆるがるれ。（『梁塵秘抄』巻二）

作家の高田宏氏は、このよく知られている歌について、著書『子供誌』の中で次のように述べています。

「この歌を思い出すたび、どきりとする。生の根源にある何かを突きつけられ、一瞬おびやかされるような気がする。…『遊ぶ子供の声』というのは、どんな声だろうか。（四三頁）と。

この「遊ぶ子供の声」は、どうもサッカーのゲームでゴールを目指す味方に対して送る声援とか、野球の練習の時にお互いを叱咤激励するような声ではなさそうです。まして、テレビゲームに熱中している時に漏れ聞こえてくる声でもないようです。

私は一九六〇年、東京に生まれましたが、七〇年代の中頃までは路地裏といわれる空間から「遊ぶ子供の声」が聞かれていたように思えます。かんけり、かくれんぼ、石けり、ゴムとび、羽子板遊び、凧揚げ、メンコ、コマ、酒ぶた遊び、等々。狭い路地ではありましたが、遊んでいる子どもたちみんなが、このなりゆきに集中

し、時に興奮のあまり叫びにも似た声を上げていたのを覚えています。

二、スポーツの構造―「近代」の理念

最近ではこのような「遊び」よりも「スポーツ」に目が向いています。野球、サッカー、水泳、体操、テニスやゴルフなど、幼児の頃から専門のコーチにつき、その技術を身につけるのに、必死のようです。Ｊリーグのチームには、ジュニアからプロまで組織だった育成機関を設けることがその発足の条件としてあります。人気チームの読売クラブのジュニアチームに入るには、かなり高い倍率の厳しい試験をパスしなければなりません。ですから、そして、入れたにしてもレベルの高い集団の中で、ふり落とされずに次のステップに上がれるよう練習を繰り返していくわけです。そして、その競争を勝ちえた技術と運に恵まれた一握りの選手がプロとしてさらに厳しい環境下で戦うわけです。

私の少年時代から母親たちに「勉強しなさい。でない

といい学校に行けませんよ。」と言われる子どもが大勢います。東大を頂点とする学歴社会は、日本の社会の中で今も生き続けていることは事実でしょう。この頂点を目指すために幼少時から塾に通い、有名進学校に入学することを目的としているわけです。

そのような勉強の世界と同じことがスポーツの世界でも言えるようになってきました。プロになるために、優秀な指導者がいるといわれるクラブあるいは中学、高校、いやその前に野球ならばリトルリーグ、サッカーならばジュニアチームというように、プロを頂点としたピラミッド・システムの中に入っていくわけです。今やひとつのスポーツ種目に秀でるとスポーツ推薦という名で一流大学に入学でき、そこでなんとか四年間やっていけば、一流企業に入社することも可能なシステムが確立しています。ですから勉強と同じように、スポーツに秀でることは、学歴を獲得し、社会の中であるレベルの地位を得ることにつながっているのです。

ですからなおさら、「教育ママ」といわれるのと同じ

ように子どもがスポーツすることに親は熱心な視線を送るのです。幼児のスポーツクラブは、どこも親が練習場を目を光らせていますし、甲子園に出るくらいの高校ならば「父母の会」がしっかりとあって、日頃の練習から試合まで、父親、母親たちが自分の子どものスポーツする姿をつきつきりで見ている状況が生まれているわけです。

これら貫徹している哲学は、徹底した競争主義、勝利至上主義の精神、いうなれば弱肉強食の考え方です。

そもそも今日みられるようなスポーツは、約百年ほど前にイギリスのパブリックスクールを主たる舞台として作られてきました。そしてそれは、それ以前にあった身体文化と大きく異なった現代の我々の社会を基本的に貫く「近代」の理念が基礎にあつたのです。

フットボールを例に出せば、十四世紀に端を発するそれは、宗教的に意味のある祝日に大人たちが「神聖なるボール」を奪い合う「祭り」でした。豚や牛の膀胱を膨らませた楕円球をふたつのチームに分かれた数百人の住

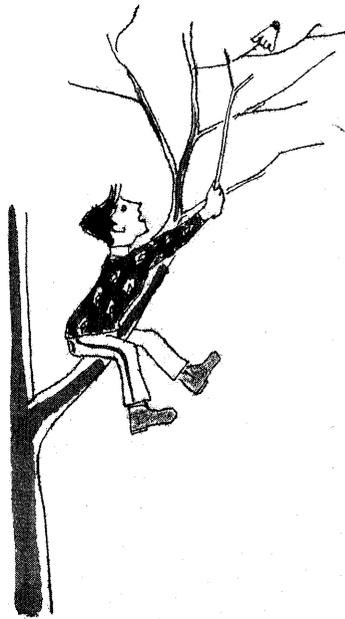
民が奪い合いながら、道路を駆け回り、農地や林を横切り、小川を渡って、決められたゴールに運び込むまで続けられました。非常に乱暴ではありましたが、それぞれの地域の伝統を守り、勝敗よりも人々がボールを追いかけることに熱中し、そのことに意味を見い出す「祭り」だったのでした。

それが、産業革命の進行によって農村が解体し、再編成される過程の中で、都市部に人口が集中し、新たに富を得たブルジョアジーが力を持つようになると状況は一変しました。彼らは、自分たちの子弟に世界で活躍するための教育を受けさせようと名門パブリックスクールに子どもを入れ、学校に対して経済的、精神的援助を行うようになったのです。そして、スポーツによって子ども的人格が形成されていくことに多大の期待をし、スポーツを支援したのです。子どもたちの出身地によってばらばらに行われていたルールは統一され、鉄道や電信、電話の発達もあって学校対抗で試合をする機運が生まれてくるわけです。村全体を舞台にしたフットボールという

「祭り」は、学校の校庭での「競技」になっていったのです。さらに、学校対抗から一国のチャンピオンを決める試合が起こり、そこから世界大会へとというように、より大きな大会で勝利することに重きを置いていきました。現在、何億という人々がテレビを通して見つめるオリンピックや世界大会はその究極の姿といえるでしょう。そして、勝利至上主義が徹底し、高度な技術を見せることでカネを取るプロの世界に人々は引き寄せられるわけです。

このような特質をもった「スポーツ」が、もはや幼児の世界に構造的に浸透しています。大人たちが作ってきた「スポーツ」という身体技法の世界に早い時期から子どもたちをどっぷりとつからせてしまうことは、子どもの精神や肉体に多大なストレスをかけていることにはならないでしょうか。また、親が学校のテストの成績と同じ目で、子どものスポーツの成績を見てしまったら、子どもはどこに逃げ場を求めるのでしょうか。

競争主義を身体で体験している「スポーツ派」の子ども



もと、「勉強派」の子どもとが小学校で両極化してしまっているという事実があります。スポーツは身体を使った表現ゆえに、「できる」と「できない」がどんな子どもでも一見してすぐわかってしまう冷徹さをもっています。ですから、競争を体で覚え込んでいる「スポーツ派」は、運動のできない「勉強派」の子どもをここぞとばかりに笑いとはず暴力性を持っているのです。

常に頂点を目指して競争するという「近代」の社会が

生み出した特徴は、勉強でもスポーツの世界でも貫徹しています。もはや、自動車のハンドルの余裕のような「遊び」はなくなっていて、ギスギスした人間関係ばかりが結果として生み出されています。そして、こうした「近代」の理念は、社会を構成する予備軍としての子ども、それも幼児期にまで浸透しているわけです。

こうした状況を、すなわち、近代の理念を変えていくような力はどこにあるのか。それこそ幼稚園であり、幼稚園の先生にあると思います。

三、「児童学」が抱え込んでいたもの

「生の根源」としての「遊ぶ子供の声」を幼児期あるいは、児童期の初期の段階で身体に刻み込ませる作業。これを意図的に行うことを真剣に考えなければならぬでしょう。そして、これらを担当する先生こそ「生を分かち合う」「遊び」という実践の場に、鋭敏な感覚で臨む自覚と自信をもたなければなりません。社会を変える源となるべき先生が、この仕事に胸をはってのぞむことが

必要だと思うのです。

このことを幅広い実践の経験から理論づけした人こそ「児童学」の普及者、高島平三郎です。一九一（明治四四）年発行の著書『教育に応用したる児童研究』には、すでに社会の中に、幼児を一定の規律の下に、様々な教科を学ばせようという風潮があることを苦慮する一説があります。

「幼稚園時代の子供は、…自発活動は盛んであるが、記憶はまだ充分に現われぬ。…もし幼稚園をもって小学校の初歩のごとくに考えて、記憶せしめることを主なる目的としたら、それは非常な間違いであると共に、弊害が多い。…一般の父母に幼稚園の意味がよく分かっておらぬために、幼児をここに入れたら何か習って来るであろう、五十音や『いろは』は小学校にゆく前に書けるようになるであろう、数えることも覚えるであろうというような考えをもっているものが多い。しかるに半年通っても一年通っても何も覚えて来ないというようなことより、父母が保母を非難するに至れば、意思の弱い自信力

の乏しい^{あまつさ}剩え、幼稚園の原理に関する知識さえ甚だ浅薄である所の保母は、知らず識らずの間に父母の意を迎えて種々のことを教え、或いは行儀というて、幼児に無理な静肅を強いたりするようにもなるのである。」(二一六―二一七頁)(注・現代文には著者が書き改めた)

高島は、百年以上も前から幼児教育の根本的ともいえる問題を憂えていたわけです。それに対して、このように述べています。

「然らば、幼稚園では直接にどういうことを目的として保育すべきであろうか。これ即ち活動の善良なる習慣を得しめることである。勿論、習慣もある意味よりいえば、一種の記憶であるといえるが、この記憶は意識的のものではない。むしろ筋肉の活動そのものの、無意識的器械的に連合されたものであるゆえ、性質が普通の記憶とは大いに違っている。かかる習慣は、子供の生れた時よりでき得る性質のものであるが、この時期に特に形成せられ易いのである。そこで、児童に、毎日一定時に遊戯をさせ、その遊戯中に知らず識らず善き習慣を養わ

せ、良き活動をさせてゆくようにするのが幼稚園の主眼である。」(二一八頁)

高島は、一種の遊戯として、子どもが知らず識らずに自然の衝動から手を動かし足を動かし、それを反復することで筋肉が運動に慣れ、次第に細かい働きをすることができるようになるとして手工(紙折り、縫い取り、切り紙、豆細工)が有効であると考えました。手で持つことや手足を動かして何かをすることが、感覚や意思の働きを発達させるために良いと考えていたからです。

さらに、玩具を重視しました。子どもの発達を細かく区分して、いくつもその名を挙げています。風車、風船、旗、でんでん太鼓、おしゃぶり、人形、まり、ガラガラ、ラッパに始まって、玉乗人形、(背)負い猿、鳥笛、器械の亀の子、器械体操(人形が鉄棒をくるくる回る)、米搗車(車を引くと杵が上下して臼の中に落ちる)、桃太郎、天神様、だるまなど。これらの他にも、動物及び人物画並びに絵本類、動物標本、こま、おはしき、ままごと、ポンプ、舟(木製)、車(竹又は木製、

積木、組立人形、竹とんぼ、豆鉄砲、けん玉、輪や縄、羽子板及び羽子、絵合わせ、錦絵、千代紙、武者絵など。

「知らず識らず皮膚にいろいろの経験を得て、その感覚が発展するのである。；感覚の練習に止まることなく、一層高い種々の精神作用をも、玩具によりて養うことができる。その中で、智力的情操の基礎たるべき好奇心の如きは、玩具によりて刺激せられることが最も多いのである。」(二六五頁)

と高島が述べていますが、まさに彼は玩具が無意識のうち感覚や智力の基礎となるべき好奇心を養うと考えていたのです。しかもそれらの玩具は木や竹でできたもので、それが皮膚感覚として身体に刻み込まれたわけですし、風や水を利用する玩具や動物に関するものも種々あります。さらに日本の風土を背景としたおとぎ話や民間伝承の話をもとにした人形などもあります。こうした意味で、幼児が玩具で遊ぶことは、日本の自然あるいは宇宙のコスモロジーを玩具を媒介にしながら遊戯として

体験し、それを無意識のうちに身体に刻み込ませるといふ意味があったと考えられます。

さらに高島は、自然が作り出す光、色、形に注目し、それが「自然美」として子どもにもよい影響を与えるとしましたし、舞踊に至るような「運動美」や歌唱やリズム遊びといった音楽、絵画などの「美意識」も遊戯の本能と同時に子どもの成長に不可欠だと考えました。また、何回も童話を読んで聞かせることで、多くのイメージを喚起し、時に絵に描き、歌を歌い、あるいは実際に身体を動かしてみることで理解や感動を高めるべきと考えました。特に日本の物語の中には海の他、自然に関するものが多く、大地に根ざした生活を想像する起源となるのです。

こうした遊戯は、ゲームの勝敗という結果や記録と関わりなく、自分のかって気ままに身体を動かし、そのプロセスを楽しむ点で、スポーツすなわち「近代」の理念と異なっています。高島のいう玩具が今となっては古いことは確かですが、ここでいいたいのは、自分の身体を

媒介にして日本の自然や宇宙のコスモロジーと無意識のうちに分れ合うことが「生を分かち合い」、「生の根源」にある何かを大切にすることにつながるということだと思います。つまり遊戯は、人間の身体が自然や宇宙としっかり関わって存在しているということを認識させる契機なのです。

ところで、なぜ高島はこのような児童学の理論を確立しえたのでしょうか。

一八六五年に生まれた高島は、家庭の事情により小学校を卒業後、十四歳にして母校である広島県西町上小学の助教師として教壇に立った後、十七歳で沼隈郡神村小学校、須江分校（主任）教諭、その後隣村の小学校に赴任後、二二歳にして広島師範学校教師、二三歳で東京高等師範附属小学校、さらに翌年から学習院初等科に勤務しました。それから約十年後には、長野師範学校に転出し、小学校教員検定委員をしています。その後、三七歳で日本体育会体操学校校長、文部省の体操、遊戯調査委員を歴任、そして、東洋大学、立正大学、独協大学、日

本女子大学の教授になりました。

高島にとって、約六十年間もの教育実践こそが宝であり、実際の場で子どもと生活していくことに重きを置いたのです。しかし、学校だけがすべてとも考えなかったのではないのでしょうか。沼隈郡神村須江分校の卒業生たちは、高島の影響で日本で最初の青年団を組織しましたし、高島によってボーイスカウト日本連盟も生まれています。東京で自分の地位を高めることよりも、それぞれの中で子どもたちとの対話、実践を重んじ、そこから理論が湧き出てきたのだと思います。

児童学が確立してきたコンテクストには、このような歴史がまぎれもなく存在していたわけで、その意味で実践の身体感覚を研ぎ澄ますことが、児童学の屋台骨ともいえる教師の役割といえるでしょう。

幼稚園の先生こそが、自然や大地に根ざした遊戯の感覚に敏感になりながら、子どもと「生の本質」を分かち合い、そのことで社会や学校、スポーツを貫徹する理念にしなやかに挑んでいたのだと思います。

〈参考〉

高島平三郎の人的ネットワークは、非常に興味深いものがあります。高島本人は、I O C委員であり、日本がオリンピックに参加する際多大の力を持った嘉納治五郎の塾生でした。その長男である文雄は、もうひとりのI O C委員岸清一法律事務所勤めていて、岸の秘書としてI O Cの会議やオリンピックに行き、大日本体育協会の主事をしておりました。また、文雄は、青春や若者らしさを言論活動の中で強調した徳富蘇峰夫妻の媒酌で結婚しています。

また、高島平三郎は三島通陽ふらばと共にボーイスカウト日本連盟を組織しましたが、通陽の叔父は三島彌彦（明治時代、警視総監だった三島通庸の三男）。彼は日本が最初にオリンピックに出場した時（一九一二）の選手のうちひとりでしたし、早大運動部選手O Bや冒険小説家押川春浪らがいる「天狗倶楽部」員でありました。「天狗倶楽部」は、明治期の野生味あふれる男たちのスポーツをはじめとした交流の場でしたし、最初のオリンピック大会の子選会開催に深く関わっています。

こうした高島を中心としたネットワークは、日本のスポーツ（特にオリンピック）の組織や観念がどのような人たちによって作られてきたのか、すなわち近代日本におけるスポーツの精神史を語る上で不可欠なものと思います。

高島平三郎について大きな示唆を与えてくれたのは、文化人類学者山口昌男氏です。氏の明治・大正・昭和における近代日本の精神史についての論稿は、数年前から岩波書店『へるめす』に掲載されています。また、文化のコンテクストの中で、実際に「遊び」を体現する試みとして、福島県昭和村の木造校舎を利用した「喰丸文化再学習センター」が九二年よりオープンしています。

末筆ながら、先生に感謝いたします。

（筑波大学講師・スポーツ社会学）

私の
子ども



生い立ちの記

時代 (1)

牛島 義友

私は明治三十九年に長崎に生まれた。父親は聖三一教会という聖公会の牧師で、住所は大村町八番地で、隣は大神宮の神社があり、左隣は一軒おいて裁判所の建物があつた。

ここはよい遊び場であり、前の道路は相当広かつたと思う。後年この場所を地図を頼りに探したが見付からず、結局県庁の前の広い通りに吸収されていゝた。教会はかなり大きな建物で広い事務室がついており、その隣に二階建ての



牧師館があり、庭に大きな無花果があった。二歳上の姉の思い出の記によると、その木に登って好きな讃美歌をよく歌っていたらしい。

私の実の兄妹は四人であるが、再婚同士の両親がそれぞれ連れ子があり、かなり複雑な家庭で母親を苦しめていた。後年になって私が家族関係の心理の中で義理の親子の関係を上げ上げた時に、先般なくなられた教育大学の桂先生は義理の親子関係を深い洞察をしているとほめてくれたが、このような我が家の体験があったからである。

父は厳格でよく叱られ、二階に上る階段の下の押入れに入れられた。一度だけ温泉に連れて行かれた事が楽しい思い出となっている。

長崎にはもう一つイギリスの婦人伝道師達が講義所を開かれていた。そのイギリスから来られたコックス先生は私が生まれた頃であったのでよく可愛がってくれ、私が盲腸で病臥した時はイギリス製の玩具を頂いたりした。この方はじめ当時のイギリス人には自給伝道師としてオックスフォードなど出身でしかもミッションには属するが無給で働く方が多かった。あとで福岡に移った時にも、ニュージールランドから夫婦で来日し、幼稚園を開きながら、伝道を助けていた方もあった。その他熊本で癩病の人のための回春病院を独力でつくれたリデル女史もこのような方で、この態度はその時の私の人間形成にも強い



影響を与えた。いわゆる貴族の義務としての奉仕の精神である。

小学二年の時、父の台湾伝道のため台北に移った。そこでは父から厳しい宗教々育をしつけられ、土曜日には教会の掃除の手伝い、又説教会のある時にはピラ配りをさせられ、非常にいやであった。又北白川宮をまつる台湾神社があり、全校生徒が遠路を歩いてお参りしたが、父はそれを嫌い、学校に行つて、「父が行つてはいかんと言いますので」とことわり、先生からいやな顔をされた。

連合運動会も日曜であるので父は参加を許さず、母が午後だけならよいと言つて、午後だけ見学していた。しかし当時はまだのちの戦時中のような迫害は受けなかつた。

数年後、教会が町の中に新築されたが、ある日曜日子供達で遊んでいて私があやまって教会の塔のガラスに石をぶつけてこわした事があった。すぐ父にあやまりに行つたが、礼拝前で信者が集まってきたので、さすがの父もいつものようにどなりつけず、叱られずにすんだ。

台北では賀来君の家によく遊びに行つたが、これは専売公社の社長で親任官で、三本筋の高官の子弟であった。当時普通の教師は判任官で帽子に金モール一本で、校長は二本筋、高等官は三本すじで、長剣を吊した人は、二、三人位



しかなかった。邸も豪壮で、広い応接間が三つもあった。毎日遊びに行っていたが、いつとはなしに行かなくなり、又親御さんは子弟の教育のため学習院に転校させた。

後年私が東大の文学部二年生になった時、彼は法学部に入學され、お会いしたが、交際は別に復活しなかった。

四年後門司に移った。ここは生活水準は低く、中学への受験勉強をするのは二人しかおらず、私は毎晩先生の宿でお世話になった。小倉中学に合格、新生活に入ったが、苦手の作文を毛筆で書かされるのが何より辛かった。又体操の時間に、自分の体が健全だと思ふ者は手を上げると言われ、素直に手を上げた所、裸にされ、背筋が曲がっている、こういう体は一番いけないと皆の前で恥をかかされ、口惜しい思いをした事がある。

(元・お茶の水女子大学教授)

ペスタロッチーと

幼児教育

鈴木 由美子

一九九六年は、ペスタロッチー生誕二五〇年にあたる。ペスタロッチーが生まれてからこの二五〇年、教育の重要性が叫ばれ、多くの人々が教育改革をおこなってきた。幼児教育史に大きな足跡を残したフレイベルも、そのひとりである。幼児教育に携わる人は誰でも、キンダーガルテンを創設したフレイベルの名を一度は耳にしていることだろう。では、フレイベルの人生に決定的な影響を与えたペスタロッチーとはいえば、幼児教育との関連で思いおこす人は、あまりないのではないだろうか。

フレイベルは、ペスタロッチー主義だったグルーナーの学校で、はじめて教育実践にふれ自己の使命を自覚したといわれる。またフレイベルは、イヴェルドンのペスタロッチー学園で、ペスタロッチーから理論や実践について学んだだけでなく、また直接的に人格的な影響をも受けている。実際ペスタロッチーは、『幼児教育の書簡』のなかで、すべての教育改革の努力は、幼児教育の段階にまで延長されなければならないと述べ、幼児教育

の重要性を指摘している。その意味で、ペスタロッチーの幼児教育思想もまた、今日、幼児教育に携わる人々にぜひ学んで欲しいと思えるだけの内容をもっているといえよう。ここでは、拙著『ペスタロッチー教育学の研究——幼児教育思想の成立』（玉川大学出版部）〈注〉を中心にしながら、ペスタロッチーの幼児教育思想を紹介したいと思う。

ペスタロッチーは一七四六年スイスのチューリヒに生まれ、一八二七年に八二歳で亡くなるまで、スイス革命を経て近代化を模索する時代の波のなかで、波瀾に満ちた生涯をおくった。青年時代にルソーを信奉したペスタロッチーは、「自然にかえれ」とのことばどおり、チューリヒ近郊に農場をもつて農業の近代化に着手した。そのかたわら、一七七四年には孤児や浮浪児を集めて貧民学校を開き、子どもたちが自立できる能力を育成しようとした。これがペスタロッチーの教育実践のはじまりである。一七八一年に刊行した小説『リンハルト

とゲルトルート』がヨーロッパに反響をよび、ペスタロッチーは一躍有名人となった。その彼が、すべての名誉を捨てて本格的に教育活動をはじめたのは、一七九八年十二月、ペスタロッチーが五二歳のときだった。

ペスタロッチーは、五二歳のとき、家族も名誉も、それまで自分が築いてきたすべてのことがらも捨てて、シュタンスに赴いた。ペスタロッチーは、スイス革命によって両親も家も無くし、浮浪児となった子どもたちを収容した孤児院で、自分の体もかえりみずに働いた。彼を駆り立てたのは、子どもたちへの愛であった。ペスタロッチーがシュタンスで、高齢にもかかわらずどれだけ献身的に活動したかは、『シュタンスだより』のなかの次の一節に示されているとおりである。

「わたしは子どもたちとともに泣き、子どもたちとともに笑った。子どもたちは世界も忘れ、シュタンスも忘れて、わたしとともにいたし、わたしも子どもたちとともにいた。子どもたちの食、べ物はわたしの食、べ物であり、子どもたちの飲み物はわたしの飲み物だった。わたしは

何ひとつもたなかった。わたしのまわりには家庭もなく、友もなく、召使いもなかった。わたしにはただ子どもたちだけがあつた。子どもたちが元気なときもわたしは子どもたちのなかにいたが、子どもたちが病気のときもわたしは子どもたちのそばにいた。わたしは子どもたちのなかで寝た。夜はわたしが一番最後に床につき、朝は一番早く起きた。」

スイス革命の戦乱によつて両親を失い、孤児となつた子どもたちは、身体的に傷つき病気にさらされていただけでなく、精神的にも人間不信に陥り、自暴自棄になつていた。そうした子どもたちを変えていったのは、ペスタロッチーの献身的な教育愛である。もつともあわれな、見放された子どもたちのうちにさえ存在する人間本性の輝き、それをみつけ、ひきだすのが教育である。その確信がペスタロッチーの教育活動を支えた。ペスタロッチーは慈愛に満ちた父親のように、子どもたちを教え導いた。そうしたペスタロッチーの教育愛によつて、春の太陽が雪を溶かすように、子どもたちのすさんだ心

は暖かく包まれ、溶かされていったのである。

ペスタロッチーは、自分のいのちをかけたシユタンスでの教育実践によつて、愛のみが愛を育てることを知つた。ここからペスタロッチーは、教育の根源は、母親と子どもとの間で育まれる愛の活動にあることを確信するにいたつたのである。人類が存続する限り、おそらく永遠に変わらないだろう母親と子どもとのかわりあひについて、ペスタロッチーは次のような美しい描写をしている。

「母親はわが子を教育し、守り、喜ばせずにはいられない。母親はどうしてもそうせずにはいられず、またまったく感性的な本能の力を駆り立てられて、そうする。母親はそのようにして子どもの欲求を満たしてやり、子どもにとって不快なものを遠ざけてやり、無力な子どもの手足になって助けてやる。——子どもはめんどろをみてもらい、喜ばせてもらう。こうして子どもの心のなかに、愛の萌芽が成長してくる。

今まで見たこともない対象が目の前に現れると、子ども

もはびっくりし、こわがって泣きだす。母親はわが子を胸にしっかり抱きしめ、あやしてやり、気をまぎらわせてやって、泣きやませる。しかし子どもの目は、まだしばらく涙にぬれたままになっている。そのうちまた、その対象が目の前に現れる。——母親はまたわが子をやさしく抱きしめ、ふたたび笑わせてあげる。こんどは子どもは泣かない。子どもは母親のほほえみに、明るい澄みきった目で応える。——こうして信頼の萌芽が子どもの心のなかに育ってくる。」

よるべない乳児は、母親なしには生存することさえおぼつかない。いのちのすべてを、自分のすべてを母親にゆだねている。そうしたわが子に、わが身を犠牲にして応える母親の愛。それは、子どもからのお返しをいっさい期待しない無償の愛である。こうした母親と子どもとの関係に、教育愛の原型をみいだしたのは、ペスタロッチーの卓見であったといつてよい。これがペスタロッチーの幼児教育思想の原点なのである。

さらにペスタロッチーは、母親と子どもとの関係のな

かから形成される愛の感情を、母親への愛から家族、友人へと拡大し、人類愛にまで発展させようとした。母親と子どもとの関係が、人間の発達における自然的関係であるとすれば、そこから拡大される人間関係は、人類が構成してきた人為的な社会関係である。ペスタロッチーの幼児教育思想の大きな特徴は、社会との関係において、幼児教育の重要性を認識している点にある。では、ペスタロッチーが捉えた社会問題とは、いったいどのようなものだったのだろうか。

十八世紀当時のチュエリとは、大きな社会変動の時代だった。それは政治的にはフランス革命の余波を受けたスイス革命であり、経済的には産業革命とよばれる近代資本主義の進展だった。政治問題については、当時、地方住民が政治的権利の平等を求めて、アンシャン・レジーム（旧体制）に対する戦いをあちこちで起こしていた。一七九八年のスイス革命により、新興中産階層はアンシャン・レジームを打倒し、市民による新しい社会をうちたてた。それがヘルヴェーチア共和国である。

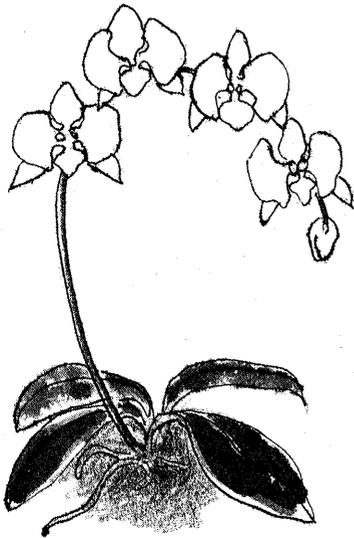
ペスタロッチーは文部大臣シュタップラーの要請を受けて、新しい社会にふさわしい人間の教育をどのようにしたらよいか、また教育者をどのようにして養成したらよいか、ということについて、検討することになった。

ペスタロッチーが出した結論は、新しい社会は、ルソーによって「発見」された個人の尊厳を中心にしたがら、しかも人間同士が愛によって結合する社会であるということだった。ペスタロッチーは、主体的に生きる個人の育成と、そうした個人が結びつく社会とを模索し、社会を構成するひとりひとりの人間の結びつきの原型を、自然的な人間関係、すなわち母親と子どもとの関係に求めたのである。

また一方で、近代資本主義の進展は女性労働の質を変えた。それまで家庭内に限定されていた女性の職業は、家庭外へと拡大された。それにもなつて家庭は大きな変革期を迎えた。核家族の増加である。婦女子の家庭外労働の増加により、それまで家庭が果たしていた教育機能は低下した。とくに重要なのは、母親の家庭外労働の

増加によって、乳幼児の教育を家庭でおこなうことができなくなっていくことである。

こうしたなかでペスタロッチーは、公的な幼児教育施設の必要性をみてとり、幼児教育者養成に着手する。ペ



スタロッチーがいうように、愛は愛によってのみ育成されるはずれば、母親の愛を受けられない子どもたちには愛が育まれないことになる。幼児教育施設の成立基盤は、まさにこの点にあるといつてよい。母親にかわって愛を子どもに育むこと、それが幼児教育施設の目的である。幼児教育者養成は、そのために必要とされたのである。

公的な幼児教育施設としてペスタロッチーが構想したキンダーハウスは、生活の困窮のためにわが子のそばから引き離され、一日中仕事に従事したり、野良に出たり、日雇いに出たりせざるをえない貧しい母親の就学前の子どもたちを一日中世話する施設であった。そこでは幼児教育者として教育された年長の少女が、子どもたちの世話をする。そしてそのための費用は、領主によってまかなわれる。こうした施設の必要性について、ペスタロッチーは『リーンハルトとゲルトルート』（一八一九年）のなかで述べている。そして同年に書かれたグリーブズにあてた『幼児教育の書簡』のなかでは、女子教

育、母親教育ならびに幼児教育者養成の重要性が、繰り返し語られているのである。

とくに注目すべき点は、ペスタロッチーが女子学校を設立し、女子教育、母親教育ならびに幼児教育者の養成に着手したことである。ペスタロッチーは決して、育児を母親の天職としてのみ考えていたのではない。それどころかペスタロッチーは、母親教育の必要性を緊急のものとして認識していたのである。ペスタロッチーは次のように述べている。「次の世代の幸福を深く心にかける人は誰でも、母親たちの教育を最高目的として考える以上のことはなしえない」と。

ペスタロッチーは、愛のみが愛を育てると考え、母親と子どもとの関係を重視した。しかしここでいう愛とは、単なる愛情ではない。前述したように、それは近代市民社会における人間結合の基本である。ペスタロッチーは、この意味での母親の愛を、「思慮ある愛」とよび、単なる愛情と区別している。「思慮ある愛」は、子どもの尊厳を尊重しつつ、しかもそうした子どもひとり

ひとりが他者を認め、愛し合うことができるよう、子どもを育成しうる愛である。そのためにペスタロッチーは、子どもに「自己克服力」を育成することを重視した。

自己克服力もまた、母親と子どもとの関係のなから育まれる。乳飲み子の必要を満たし、献身的に世話をする母親の愛情に対し、子どもの側に「愛し返し」の感情が生まれる。愛による結合を基礎として、「母親に逆らうことはよくないことだ」という予感が生まれ、こうした消極的な自己克服が、次第に積極的な自己克服へと発達し、さらに権利・義務意識へと発達する。ペスタロッチーは、ここに社会結合の基礎をみたのである。

自己克服力を育成するためにもっとも重要なのは、母性愛の質である。すなわち、「母親が自分の愛をできるだけ強く働かせ、しかも自分の行為においては思慮によって愛を調節すること」が必要とされ、母親に「思慮ある愛」が求められるのである。そう考えると、自己克服力の育成は、母親自身が自主的、自立的な存在であってはじめて可能となる。そのために、女子教育、母親教

育が急務であるとされた。またペスタロッチーが、自然に母親にそなわるとされる母性愛にはなく、「思慮ある愛」として形成された母性愛に教育的意味を求めたことは、幼児教育者養成の可能性を導いたのである。

ペスタロッチーが設立したイヴェルドン女子学校での実際が、必要とされた幼児教育者の質を明確に示している。イヴェルドン女子学校でペスタロッチーは、未来の母親を育成するとともに、女性の教師を養成しようとした。女子学校での教育内容は、ドイツ語、フランス語、書写、計算、形・量の直観的学習、図画、歴史の基礎、博物学、地理学、宗教・道徳の学習等であり、理念的にも内容的にも、男子学校と何ら変わりなかった。ペスタロッチーは幼児教育者に、深い知識と教養を求めていたのである。深い知識と教養に基礎づけられた教育愛であってはじめて、子どもの心に「思慮ある愛」を育成できるとペスタロッチーは考えたのである。

このようにペスタロッチーは、自由、平等、博愛にもとづいて形成された近代市民社会の存続のために、幼児

教育ならびに幼児教育者養成を重視した。近代市民社会の存続とは、ベスタロッチーによれば、個人の尊厳とそれにもとづく人間同士の結合の重視である。個人の尊厳は、それを尊重し、お互いに分かり合える、認め合うことのできる人々の間にあつてはじめて意味をもつ。そこで幼児教育の課題は、自分の価値を認めながら、しかも自己克服力によつて他の人の価値を認めることができる子どもの育成であると同時に、そうした子どもたちが愛によつて結合しうるような集団を形成することであるといえよう。これが、ベスタロッチーの幼児教育思想の根幹なのである。

価値観が多様化したといわれるなかで、ひとつの価値だけを追い求めることを強要されているかのような子どもたち。他の人と同じ価値を共有していなければ、アイデンティティを確立できないかのような子どもたち。ベスタロッチーは、まったく逆のことをいつている。自分を愛すること、それが他者を愛することにつながる。自分の価値を認めること、自分自身を知ること、それが

他者への理解につながると。すべては自分から、かけがえないひとりひとりの子どもからはじまる。そしてそのために、幼児教育は決定的な意味をもちうるのである。ベスタロッチー生誕二五〇年を迎える前に、せめてベスタロッチーが望んだ子どもの尊厳の確立だけでも、実現するよう祈らずにはいられない。

(名古屋自由学園短期大学)

〈注〉

鈴木由美子著『ベスタロッチー教育学の研究―幼児教育思想への成立―』(玉川大学出版部)は、平成五年五月に、第四十六回日本保育学会「保育学文献賞」を受賞しました。

(編集部)

食と文化

—素材・嗜好・料理—

島田 淳子



新しい年がやってきました。正月には皆さんおせち料理や雑煮を頂きながら新年を祝うことと思いません。ハンバーグステーキや卵焼きが大好きな幼児にとっておせち料理はどうもあまり魅力がないようですが、これらの料理には私たちの祖先の健やかな生活に対する願いが込められています。黒豆はマメのころ合わせて健康を、えびは腰が曲がるまでの長寿を、数の子は子孫繁栄を、こぶ巻きは「よろこぶ」

のころ合わせて喜びが広まるように縁起をかついだものと言われます。また、ごまめは昔田の肥料にしたことから田作りとも言われ、豊作を祈念するものと言われております。おせち料理を頂きながら、何もかも便利な今と違う時代に生きた人々の素朴な祈りを幼児たちにも感じてほしい気が致します。

田作りと言えば、最近、若い人の中には田作りのような丸ごと一尾の魚は食べられない人が増えてい

るといふ話を耳にしました。私のまわりにはそういう人は見当たりませんが、眼玉が気持ち悪いのだからです。何となし分かるような気も致しますね。例えば、いなごや蜂の子など信州生まれの私は食べられますが、食べられない人が多いのではないのでしょうか。そういう私でも、中国料理で大のごちそうと言われる生きた子鼠は頂けそうにありません。

このように、ある食物を受けつけるか否か、好むか否かは、幼少期の食習慣や食経験に大きく影響され、文化圏が違くと食物の価値が大きく異なる例が少なくありません。

日本は四方を海に囲まれており、海の幸である魚には事欠きませんでした。特に尾頭つきの魚は切り身より格が上であるとして親しまれており、日本の食文化の特徴の一つとも言えるものです。魚が生きているように胴をうねらせて、頭と尾を持ち上げて串をさし（これをうねり串と言います）、尾やひれ

に塩をたっぷり塗りつけて塩が溶ける前に焼く技術も発達しています。（表面が化粧したように白く焼き上るので化粧塩と言います）。日常の食事ではこまごまでもありませんが、日本人が丸ごと一尾の魚を頂けなくなってしまうのは残念な気が致します。魚には体に良い脂肪が含まれておりますし、骨はカルシウムの良い給源でもあります。幼児の皆さんにも積極的に食べてほしいものと願わずにはられません。

魚と並んで日本の食文化を代表する食物と言え、言うまでもなく米です。“ご飯に梅干し”とか“ご飯にみそ汁”だけで、“一升飯”と言われる程たくさんのお米を食べた時代は終わりましたが、“ご飯ですよ”と言えば“食事の仕度”ができた”という意味になるくらい、米は日本の食文化の中心をなしています。しかし、この四十年間に日本人の食生活は著しく多様化し、豊かになりました。これに伴って、米の消費量は徐々に減少してきておりま

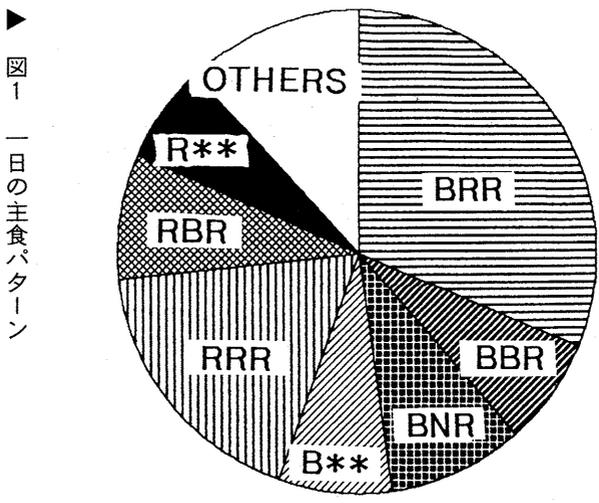


図1 一日の主食パターン

左から朝、昼、夕食
 B…パン R…米
 N…麵 *…その他

す。

それでは、日本人の一日の食事の主食パターンはどうなっているでしょうか。

私の研究室で、都市部に住む家庭を中心に行った調査によりますと主食パターンは図1のようになりました。朝食をパン食ですます人が多く、食生活の多様化がこの図からも分かります。しかし、この図を良く見て頂きますと、どのパターンにおいても、夕食は“R”すなわち米となっていることに気がつくでしょう。食生活に関する調査は数多くあり、調査の対象によってはこの図程は多様化していない、すなわち、もっと米食が多い結果も出ていますが、どの調査においても共通に言えるのは、夕食です。夕食の主食はほとんどの家庭が米で、しかも白飯となっているのです。

御承知のように日本人がもっとも重きを置いているのは夕食です。食事にかける時間、出現する食品数、料理数などの調査でも夕食がもっとも多くなっ

ております。この夕食に出現するのが白飯ということとは、飯、菜、汁という型がしっかりと残っていることでもあり、米が日本の食文化に大きなウエイトを占めていると言えましょう。

ところで、今ここに述べている「主食」についても主食という言葉の意味が分からないという方はいらっしゃいますでしょうか。いくつかの辞書によりますと、「主食は従来茶碗で食べるものを意味し、皿や椀に入れたものと区別された、現在では、飯、パン、麵のように、主としてエネルギー源となる食物を指す」とあり、副食とはっきり区別されるようになったのは徳川時代からとのこと。こんな説明をつけ加えなくても、ほとんどの人は主食の意味を知っておりますし、事実多くの調査が主食の説明なしに支障なく行われています。

ところがこの言葉を英語にしようとしたと、該当する言葉が見当たらないのです。比較的近いものに *staple food* という言葉がありますが、ちょっと

ニュアンスが違ひまして、主食というよりは主要食糧という意味になります。

何故、該当する言葉がないのでしょうか。それは、「主食」という考え方そのものがないのです。西洋料理のフルコースあるいは西洋料理が並んだ食卓を思い浮かべてみて下さい。オードブル、スープに始まって様々の料理が私たちの前に置かれ、パンは添え物のように左側に置かれています。パンは主食と言えぬ立場にありません。そうかと言って種々の料理が主食というわけでもありません。食文化の違いはこんなところにも存在するのです。

さて、日本人の主食の代表である白飯ですが、ふっくらと炊けてやや粘り気のあるものが好まれ、硬くてポロポロした飯は好まれません。つまり、私たちはこのような嗜好を文化として共有しているのです。

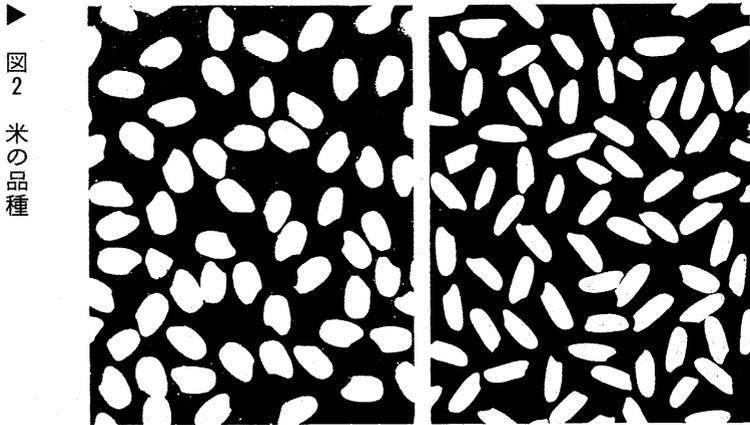
このような白飯にするためには、まずそれに合っ

た米を選ぶこと、次にそれに適した加熱条件で炊くことが必要になります。

良い品種を得るための日本人の努力は昔からたゆみなく行われており、今ではおいしい米が手に入るようになりました。もっとも人気のあるコシヒカリは作付面積50%を越えています。品種改良の努力は、ネーミングによる消費拡大努力にまで発展しており、“ひとめぼれ” “あきたこまち” “つがるおとめ” “ゆきの精” “はなの舞” など、聞いただけではどんな食品のことか分からないような品種が続々登場しております。

昨年は戦後最大の不作ということで、輸入米に頼らざるを得ない状況になっております。輸入は加工米を主とするようですが、ふっくらしない御飯を頂くのも “文化” というものの面白さを味わう良いチャンスかもしれませんね。

といえますのは、日本人が食べている短粒のジャポニカ種は世界的に見るとマイナーであり、大部分



▶ 図2 米の品種

ジャポニカ種

インディカ種

の民族は細長いインディカ種を食べています。(図2) これらの米はもともと粘らないのですが、調理法を読んでみますとなるべく粘らないよう気をつけているのです。フランスでは「ゆであがったらぬめりがなくなるまで洗う」という記述が見られますし、西アジアに共通した特色は「米を湯から煮て一度ゆで汁を捨ててしまい、それから炊き上げる」といって「とだそうですし、タンザニアでも「吹きこぼれは捨てる」ようなのです。日本人が粘る米を使いながら、炊く時にもおねはをこぼさないように細心の注意を払っているのと正反対です。

以上のように、一口に米と言いましても、種類も、調理法も、また食卓上の位置づけも文化圏によってそれぞれ違いますが、「水を加えて加熱する」という点ではどの文化圏も共通です。米に水を加えて加熱することにより、米の硬い組織は軟らかくなり、デンプン分子の結晶構造がくずれて消化しやすくなるのです。デンプンは人間が生きて行くの

に必要なエネルギーを供給するものとして非常に大切なのですが、エネルギーになるためには体の中で消化され、吸収されなくてはなりません。消化吸収されやすくなるのもっとも有効な手段が水を加えて加熱することなのです。この点については世界共通でありながら、人間が実際に食べる時に口の中で感じる料理の状態、すなわち、味、粘り、硬さなどについては文化圏によって全く異なることを考えますと、人間がつくづく面白いと思うと同時に、日々の生活の大切さを改めて痛感する次第です。

幼児の皆さんには、日本の食文化を大切にしながら異文化にも興味と関心を持つしなやかな心を持った大人になってほしいと願うものです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園園長・食物学)

倉橋惣三「保育法」余聞 (3)

保育者の自意識

良寛と布袋和尚

土屋 とく

「自ら育つものを 育たせようとする心が保育の心である」とする倉橋先生は、その実際的な保育法の原理を「自発性」と「具体性」の二つに置いている。

そしてこれは子どもをありのままに見つめることにより、子どもの生活そのものから学び、導かれるものである。と講義録の第二章で説かれている。

六十八頁以下

「保育はいかなる様式を取っても良い。人々の特色、またその場合場合の生きた活用をすべきであるが、いかに立派にされたとしても、その方法が自発的になされなければ、その根本原理に違反する。

また、その結果が実に立派であっても、その方法が自発的にあらざれば、それは根本原理に背いた大失敗である。」……と。

そして育てるべき自発性は、子ども自身に備わっ

ている生命力・伸びる力そのものを、いかに良く育て得るかに懸かっていることであり、幼児教育に対するゆるぎない一貫した信念でもあった。

さらに子どもの自発性の姿にふれたあと、大人の側つまり教育者として陥り易い傾向を指摘し、こう語る。

「保母として、良き大体の条件は、自意識の余り強いのは避けたいということだ。

良寛和尚などは、実に無自意識な人の代表だ。」

良寛さまと遊び

手鞠をよめる

冬ごもり 春さりくれば 飯乞うと 草の庵を
立ち出でて 里にい行けば たまぼこの 道のち
またに 子供らが 今を春べと 手まりつく ひ
ふみよいむな 汝がつけば 吾はうたひ あがつ
けば なは歌ひ つきて歌ひて 霞立つ 長き春

日を 暮らしつるかも」

良寛について我々が先ず思いうかべる姿といえば、子ども達と日暮れまで無心に交わり遊び、真の友達でありえた童心の持ち主というイメージである。

彼の日常の行動を伝えたものとして数々の逸話が残されているが、庵を出て里におりてきた良寛は、待ちかまえる子どもに取り囲まれ、手鞠をつき、おはじきをし、若菜を共に摘み、かくれんぼに興じたという。

○時には子ども達と遊ぶうち、死んだふりをして道に伏したままじっと動かない。子ども等は草や木の葉を体の上に乗せ、お葬式のまねごとをして笑いあう。その内子どものひとりが良寛の鼻をつまんで放さない。遂に苦しくなって彼は生き返ってしまつた。

○また、かくれんぼに興じているうち日暮れが迫

り、子ども達はひとりふたりと家に帰っていったが、いつまでも物陰にひそんでいる和尚の姿をいぶかしんだ村人が尋ねると「シッ そんな大きな声を出すと鬼が見つけるわ」と言った。

○子ども達はぞろぞろと後につきながら、「良寛さま一貫」と言うと驚いてそりかえる。又「二貫」といえば又そる。三貫、四貫、とますますそりかえるうちに、とうとう倒れてしまう有様を見て皆どっと大笑いする。等の日常であった。

こうしたことに対して何故そのようなことをするかと尋ねた人に彼はこう答えたという。

「禪師笑いて曰く、然り、児童は余を驚かすを以て楽しみと為す也、余は児童の楽しむ所以を以て楽しみと為す。児童楽しみ、余も楽しむ。一挙兩楽なり。以て常と為す。真の楽しみのこれより大なるは莫し。」と、禪師の天真をたのしむは、この類也。

『伝 良寛奇話 良寛禪師木鉢記』

倉橋先生の著作及び関連資料の中で、良寛につい

て触れられているものは、この講義録だけであって、記録として残されたものは現在のところ他に見当たらない。

自意識について書かれているこの箇所には、なぜ良寛和尚が、そして並列的に布袋和尚がでてくるのであろうか。

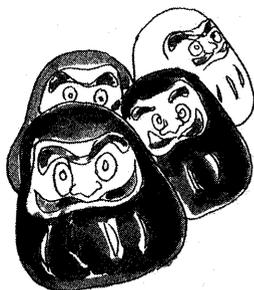
布袋はてさま

「私は布袋が大好きである。あの丸い頭、ふくよかな頬、殊に使々たる蟠腹、いかにも呑気に悠々暢達の様子が、何とも言えず大好きである。……大きな布袋を荷って、長い杖をもつて、いつもにこにこして大勢の子供たちに取りまかれているあの布袋さんである。しかして私の布袋を好むこと年既に久しい。」

大正六年の『婦人と子ども』（『幼児の教育』の前身）六号に書かれ、十五年に幼児教育に対する時々の所感のまとめとして本となった『幼稚園雑

草』の一項に〈布袋讚〉がある。

狩野芳崖に傾倒していた先生は、その遺墨展を見て『慈母観音』にあらためて感動するとともに、図らずももっとも愉快な発見をしたという。それは『布袋唐子遊図』と題された一幅であり「漫々たる便腹をたれて踞座し、五人の唐子がそのひざにまつわって嬉々として戯れている。構図においては普通の布袋図と多く変ったところはない。ただその顔、相好。ほんとに洒々落々として、腹底から邪気的な



い顔つき、ことに子供たちを見て、溶けて流れる様に笑みこぼれている目つき、私は私の好きなものとうの布袋を実にこの作において見出したような気がした。」のであった。

(七福神の一人として親しまれている布袋さまは、中国の禅僧。名を契此と言い常に大きな袋を担ぎ喜捨を求めて歩いて、人の幸せや天気を予知したため人々に喜ばれた。寺で参禅しつつ亡くなったという。日本では神格化され恵比寿・大黒さま等とともに福德円満をもたらす象徴になっている。)

そして布袋に就いての所感を次のように述べている。

「我々教育の業に従事するもの、ことに幼児の教育に従事するものは、その計画においてくわしく、所期において密に、責任を感じる敵に、すなわち大に細心でなければならぬ。これがためには種々の研究もしなければならぬ。……研究者としてはその学問に対して、すこぶる神経質でなければならぬ。また

實際教育の上にも自分の實際していることに、絶えず精緻なる反省を施し、深刻なる批判も加えてみなければならぬ。……しかし子供に直接接するにこの神経質をもってしてはならぬ。神経質はもっとも常に相手を神経質にする。しかし子供はもっとも神経質でないものであって、また神経質にされてはならぬものである。」

「子供は抱かれようとする。包まれようとする。酔わされようとする。また、そうしてやらなければならぬものがある。それでなくては子供は伸びない。育たない。生きない。すなわち我々は、研究者、反省者としては神経質であっても、子供に接するものとしては、もっとも非神経質でなければならぬ。しかししてこの注意はことに現代の教育において一層必要である。」

「こう考えて来て、私の心はいつでも布袋に来る。ああ、あの大きな腹。布袋はあの大きな袋の中に一切の所有品をいれているのだということであるが、

あの大きな腹には一層多くのものを入れてあます所はあるまい。……だから、いつでも悠々として迫らず、嬉々としていきどおらず、教うるよりも共に遊び、共に遊ぶよりも子供らをして我において自らよく遊ばしめるの大教育が、つとめずしておのずからに出来ている。むべなるかな。布袋のある所、群児の必ず喜々として追隨するや。……」

ひとりの時の自意識

良寛と布袋について語る講義録のこの箇所は、僅か三行に過ぎないが、実際の講義の中ではかなり詳細な説明がなされたのではないかと推測される。なぜなら見落としてはならないのは、次の文章であり、その内容についてである。

「良寛和尚も、ほてい様も、一人でいる時は、実に深刻な自意識が働いていたのである。」

つまり無自意識の代表としながら、つづけて両者について「ひとりの時は」と対比させているこの論

法のなかに、看過することの出来ない重要な保育者の心構えが含まれていると考えられるからである。

それは既に「布袋讚」の引用からもわかるとおり、日常子どもに接するこちら側の態度や心の持ちようと、保育の「時」そのものから離れた保育者の在るべき姿勢について挙げられているいくつかの警告との関連である。

すでに神格化されている布袋については、人間が希求する理想像が描かれていると言つてよいかもしれないが、良寛については、その実像を語る資料は多く残されており、なぜ倉橋先生がこうした発言を付け加えたのか推論することは可能である。

うらかな春の陽の中で子どもと戯れる好々爺としての良寛ではあるが、彼が出雲崎の名主見習として挫折のうちに若年で出家し、長い修業と心の変遷をへてこの境地に至ったこと。また生涯を独り身のうちに置いて、禅の道に、漢詩に、和歌に、書を究めることに没頭したことはあまり一般には知られて

いない。

よごれ、ほつれた僧衣をまとい托鉢に歩く傍ら、いつも持ち歩いている自作の手鞆やオハジキで子どもと無心に遊ぶ良寛。そんな彼が庵に帰ってただひとり思う心を表した詩がある。

生涯、身を立つるに懶もろく

騰々、天真に任まかす

囊中、三升の米

爐邊、一束の薪いっさく たきぎ

誰か問わん、迷悟の跡

何ぞ知らん、名利の塵

夜雨、草庵の裡もも

雙脚、等閒に伸ばす

雪深い五合庵に梢をわたる風の音のみの静寂の中の彼の姿。これもまた彼の真の姿でもあろう。

また、「行燈の前に読書する圖」と書かれた良寛



◀ 「良寛さまと毯」の像（新潟県）

（平成五年十月 筆者撮影）

の自画像があり、その右に

“よの中に交じらぬとにはあらねども

ひとり遊びぞ我はまされる” と。

この歌の解釈について、北川省一は複雑な内容が考えられるとしながら、世間一般の人々との交渉よりも、むしろ良寛が愛したのは子どもたちの世界であり、或いは子どものように無邪気な心情ではなかったかとその著書のなかで語っている。

しかし最晩年に詠んだ

“裏を見せ表を見せて散るもみじ”

の句は自然と一体になった彼の心ではあっても、深いところで哀しい。

子どもと布袋と

良寛が人の求めに応じて書いていくつかの「戒語」のなかで子どもの教育に関するものとしては、

「一、子どものこしゃくなる」

「一、子どもをたらかしすかしてなぐさむ」

があるが、この二つのことばは必ず洩らさなかつたという。

子どもが子どもらしい純真さに欠け、生意気な態度をとることは好ましい事ではなく、また大人が子どもをたぶらかしたり、だましたりして困らせ、そんなようすを見て笑う等ということは良寛にとつて絶対に許せない行為であつた。

彼の残した多くの書の中に、布袋を詠んだ偈（仏徳または教理を讃美する詩で、四句よりなる）に布袋を描いた自画自賛のものがあつた、

朝あしたに布袋を弄し 暮るるも布袋

弄もし来り弄もし去つて知らず幾と辰となるを

南無婦命 老布袋

天上天下唯一人

この他にも布袋との関係が深い。

人々が良寛の姿や生き方のうちに布袋を見、彼もまた、自身を布袋に重ねて考えていたのではないかと言ふことは興味深いことである。

良寛の徳を慕いその研究も膨大な数にのぼるが、彼を一般にひろく知らしめ、今も尚名著とされる相馬御風の『大愚良寛』が刊行されたのは、大正七年のことである。

倉橋先生の該博な視野のなかには、良寛も布袋様も、充分に内部の検討を経て評価されていたのではないかと思う。

そうであるからこそ、保育者の自意識について説明をするあいだに、典型的な無自意識の人物像として良寛の名をあげ、それにつづけて一見矛盾するかにとれるひとり居ひとりの心のうちを、さりげなく話題にだしたのではなからうか。

育てる者として

子どもの生命力としての自発性を保育法の第一に挙げ、育ちゆく姿に〈おどろく〉ことの大切さを、その自発にひきずられていく楽しみを、干渉のしすぎをいましめることを先生は先ず説く。

そして大人に自発性が少ないのは、その自発性を妨げる何らかの気持ち働き、教育者としての効果意識、過剰な自意識、神経質な言動はけっして子どもにとってプラスにならないことを戒める。

子どもと共にあること。子どもと遊び、子どもとこちら全体が解け合い、共鳴しあってもよきだけ温かく快いハーモニーこそ保育者の目指すものである。

一方〈布袋讃〉に書かれてあるように、子どもと離れた時に要求される細心な配慮を欠いてはならず、保育者はその為の多面的な努力を重ねるしかないのではなからうか。

“人の身はならわしものぞ子どもらそ

よく教えてよねざらいますして 良寛 “

(洗足学園短期大学)

参考文献

- 倉橋惣三「保育法」講義録 68～81頁 他 フレーベル館
- 倉橋惣三選集 第二卷 37～40頁 フレーベル館
- 大愚良寛 相馬御風著(渡辺秀英 校注) 考古堂書店
- 唐木順三全集 第十三卷 良寛 筑摩書房
- 良寛 [上] [下] 井本農一 講談社
- 良寛その大愚の生涯 北川省一 東京白川書院
- 春秋321. 322. 永遠の人 良寛 北川省一 春秋社
- 良寛 吉本隆明 春秋社 他

E っ ん っ

青木 章子

帰国して、早くも三か月がたちます。五年間ロサンゼルスに滞在し、その間、学生になり、教育実習を受け、公立小学校で担任を経験しました。あちらの社会の中に入り込んで生活していくにつれて、感じ方や行動の仕方など、自分の多くの面が変わってきたと思っていました。帰国前には、日本に戻ったら再適応が大変かもしれないと、考えていたほどです。ところが、住み慣れた所で再び暮らし始めると、自動的に昔のままの自分が蘇ってきて、あちらでの自分、そして生活は、本当だったのだろうか。それは遠い遠い夢の中のことのように思えます。変わるのではなく、必要に応じて、自分の新しい面、それまでとは異なる面が引き出されるのであって、自分の置かれたそれぞれの環境・文化の中で、人はそれに合った適応の仕方をするということなのでしょう。

私があちらで受け持っていたのは、学習障害や情緒障害などのある子供達の為の、高学年の特殊教育

学級で、カリフォルニア州では、スペシャル・デー・クラス (Special Day Class) と呼ばれています。本来の担任が、子供達の行動をコントロールできず、過労で倒れた後、完全に無秩序になっていたクラスを学年の後期から引き継ぎました。始めは危機的状况が多くあり、大変でした。

担任を始める直前にクラスを観察していた一日、体育の授業でサッカーをしていた時、何かにかつときたJが、凄い形相でBを追いかけ始めました。Jは怒ると自分をコントロールできなくなり、容赦なく殴る蹴るの暴力をふるうので、気をつけるようにと言われていました。私は、Bを守ろうとして駆けつけ、Jに止まるよう言いながら、逃げ回っているBを自分の方に引き寄せました。Jとの間のついたてになろうとしたつもりなのですが、Bはひきつった顔で私の手をふり払い、「おまえは嫌いだ。ぼくの方に来るな」と怒鳴り、泣き叫んで教室の中に駆け込んで行きました。気が立っている子供に手を触

れたのは、誤りでした。私の失敗で事態が急転し、誰もけがをせずに済んだのが、幸いでした。

皆が恐がり、「危」マークをつけられていたJとのつき合いは、たった一週間でおしまいでした。家で母親をつき倒して踏みつけ、恐れた母親が警察を呼び、彼は専門の施設(学校)に送られました。複雑な家庭環境・生育背景がありそうでした。彼は、学習することへの意欲が強くて頭も良く、教えるのが楽しい子供でした。授業中、見事なことを見事だとほめると、得意気で嬉しそうな幼児の表情を見せ、そんな表情の中に、いつもは大人ぶり、凄んでいるJの、本来の姿を見た気がしました。大人から、気づいてほめてもらったり、認めてもらう喜びを体験してこなかった子供、そして、何らかの経験によって、子供時代を、安心して子供として生きることを奪われてしまった子供のようで、不憫に思います。

担任を始めたばかりのある一日、下校後の送迎バスの中で、Sが怒ってNの首をしめた出来事もありました。クラスの子供達がバスに乗り込むのを見届けた後、いつもはすぐに教室に戻るのですが、その日は悪い予感がしたのか、しばらく校門の傍に立って、バスを見ていました。すると、中で何か大きな動きが起こっているのが見えました。何だろうと近づいて見ると、運転手が大声で、「先生を呼んできて」と叫んでいます。駆け込んで目に入ったのは、Sの腕をNの首からひき離し、大柄なSの体を必死に抱え込んでいる運転手。そして、床に仰向きに倒れたまま、呼吸困難のしゃがれた声で「殺してしろ。殺してしろ。」と泣き叫び、Sをあと立てているN。追いつめられて逆上し、恐ろしい表情をしたSを見た瞬間、これは大変だと思った私は、彼に手をさし伸べて、「大丈夫だから、私と一緒にいらっしゃい。」と、穏やかに、かつ強く、言い続けました。少し落ちてきたSは、私の手を取り、

バスを降りようと一緒に出口まで来たのですが、中から再び「殺してしろ」と、Nの絶叫……。振り返って突進しようとするSの体を私はしっかり押さえ、鬼の形相かつ腹の底から大声で、「Never say again（そんなことを口にするんじゃない）」と、Nに向かって一喝。Sには穏やかに、「一緒にいらっしゃい」と話しかけ、彼を校長室まで導きました。Sは、別人になったような凍りついた表情で、「彼を殺してやる。彼を殺してやる。」と繰り返していました。校長室にSを座らせて、外で校長と話し始めた頃には、私の方が興奮で声もうわずり、このようなことがこの子達の間では日常茶飯に起こっているのか!! と、ショックを受けていました。SもNも、又、Jも、衝動をコントロールすること、今までの成長の過程で学んでこれなかった子供達です。怒りなどの感情をコントロールする力だけでなく、欲しくても他人の物は取らない、盗まないなどの、欲求をコントロールする力も育っていません。

んでした。既に体も大きく、力もあり、思春期を迎えようとしています。このまま衝動を制御することを学ばずに大人になっていけば、冗談でなく、将来は監獄に入っているか、殺されていると、私は、校長に向かって怒っていました。ギャング同士の闘争で、若者の命が毎日消えていくロサンゼルスにおいては、あと数年の将来の話です。

子供同士の暴力と、先生の指示を何とも思わない無秩序を早急に治める為、私は担任第一日目より、文具や玩具やキャンディーのいろいろ入った“宝箱”なるものを、クラスに用意しました。そして、他の子供のことを考えたり尊重して行動した時、人の話をよく聞いていた時、状況をよく考えて行動した時、感情や欲求をその子なりにコントロールできた時、ベストをつくして学習した時などに、それに気づいて心からほめてあげると同時に、小さなシールを各自に渡しました。彼らはそれを大切に集め、

子供によっては、いくつ集まったかを見るのが楽しみなのか、又、自分がこんなにたくさん良いことをしていると、いつも目の前で確認したいのか、シールを集めて貼る自分の紙を、机の上に貼りつけていました。シールがある数たまると、宝箱を開ける時で、好きな物を一つ選んで持って帰って良いのです。児童学を学び、子供の主体性と、内からの育ちを重んじる保育を実践しようとしていた頃には、思いつかなかったことです。即物的に育つのを助長するような、子供を物で操作するような後ろめたさは時々感じましたが、不満と敵意に満ちた彼らの顔が、喜びにほころぶ瞬間を想像しながらの、宝箱の中身の買物は、しばらくの間、私と主人との毎週末の楽しみになりました。(子供達の話は、二人でよくしたものです。それぞれの子どもが興味を持ちそうな物は、あれかこれかと話しながら、男の子の好きそうな物を彼にも選んでもらいました。いつも快晴の空の下、短パンにTシャツで、車でどこにでも

すぐに行けて、混雑のない広い店でショッピングできるのは、ロスの、疲れずに楽しいところですよ。

弁解するようですが、私の意図は、子供達の行動を早急にある方向へ導こうとする以上に、彼ら自身が気づくことの少ない、自分のもっているたくさん良いところ、自分のしているたくさん良いことを、目に見え、手に取る形で、しっかりと知って欲しいというところにあつたように思います。私とのあいだの、言葉のやりとりだけの普通のかかわりでは、彼らがそれらを認識できることなく物事が流れ去っていくような、そんな感触があつたのです。

クラスが落ち着き、子供達と私との信頼関係ができてくるにつれて、シールは次第に、しょつ中忘れられ、宝箱も数か月でなくしてしまいました。ところが、ごほうびシステムだけは捨てきれずー私の中に、その自信がなかったのかもかもしれませんー、一年半を経ても、子供達はたまにもらうシールを集めては、数人で一緒に料理をして、ランチタイムに私と

食べるなどということをしていました。

欲求や感情の衝動をコントロールする力の育ちに、大変関係があると思います。BやS、N、J、そして今日は長くなるので紹介しない他の大変な子供達に共通に見出されたことがあります。それは、彼らには、自分を信じる力と言いましようか、自分に対する肯定感のようなものが十分に育っていないということ。生まれた時から大人とのかかわりの中で育つべきはずだったものが、育っていないのです。自分を支える内からの力が弱いだから、追いつめられやすく、非常に不安定です。

例えば、Bは、彼のした悪いこと、すべきでなかったことを私から指摘されたり、自分のしたくないことを私からするように指示されたりすると、かんしゃくを起こして持ち物を引き裂いたり、塗りつぶしたり、机の下に長い間しゃがみ込んだり、叫んで外に飛び出してしばらく戻って来なかったり、と

ということが度々ありました。批判を受けることや、フラストレーションに、耐えきれないので。彼は、出会ったばかりの頃、暗く無表情で閉じ籠もっているか、激怒して飛びかかってくるのだけれど手を出すことはせずに、泣き叫んで走り去っていく、という両面を見せる子でした。心の奥底で、自分はだめな子だ、価値のない存在だ、自分は愛されていない、と思っているようでした。自分に対するこの感情は、Sにも強く見られました。彼らが求めているもの、必要としていたことは、誰かから理屈なしに愛されたり、受け入れられたり、本気になって叱られたり、世話される体験—まさにこれらは、赤ちゃんの、そして、幼児の体験です！—そして、自分について誇らしく思ったり、満足して気持ち良くなる体験の、積み重ねだったろうと思います。

他の学校に転校していったSは、最後の日、他の物は机の中に置いたまま、前述のシールの紙だけをはがして、持って行っていました。子供達の去った

後の教室で、思わず可笑しくなり、彼にとって大事な物だったんだなあと思ったのを覚えています。苦労して集めたから、捨てるに忍びなかったのでしょうが、彼にとっては、良い子であることの証拠、そして、ほめられたこと、自分にとって満足したこと、楽しい思い出だったのかもしれない。

スペシャル・デー・クラスで出会った子供達は、教師をすぐに力関係の争いに陥れ、絶えず挑戦と試練を与えてくれる“つわもの”揃いでした。同時に、それまで経験したことのない“情熱”のようなものを、私の中から湧き起こさせる人達でした。彼らの多くは、“捨てられた”子供達です。幼児期に、自分にとって大切な大人から捨てられた、という体験をしてきています。ある子は、内に怒りを抱き、ある子は暗い“うつ”を抱え、社会的にもうまく適応していません。

あちらでの私は、よく叱る、うるさくてしつこい

教師だったと思います。それまでの、子供の背後から、子供にはわからないように助けたり、導いたりするなどというスタイルは、どこかに投げ捨ててしまいました。私の関心が、主体性の育ちうんぬんには、主になかったからです。

親から愛され、手をかけられてきた（手をかけら

れすぎている？）子供達に再び接すれば、きつとまた、Eさんと一緒に働いていた頃のような先生に、戻るだろうと思います。

こちらの子供達についての、何かおもしろいことを、今度Eさんから伺える機会を、楽しみにしていきます。（元・お茶の水女子大学附属幼稚園）



ある日の育児日記から

(37)

佐藤 和代



圭は四歳半。どうやら、ボーイフレンドができ
たようです。

お相手は、保育園のクラスメートのI君。この
ところI君の話がよく出るな、と思っていたらお
たより帳にこんなことが書いてありました。

「このごろ圭ちゃんは、いつもI君と並んで食事
をします。今日はI君のきらいなおかずがあった
のですが、私が食べさせようとしてもダメだった
のに、圭ちゃんが「アーン」と口へもっていった
ら、モグモグ食べてしまいました。」

むむ、いつのまに。先生に聞くと、お散歩もお

当番も一緒だとか。そして「圭ちゃんのおかげで
I君がずいぶん落ちついてきたんですよ。へえ
圭もやるじゃないの。」

そういえば、AちゃんとF君が仲良くなったと
き、「Aちゃんのおかげで、ひとり遊びばかりし
ていたF君が、みんなと遊べるようになった」と
いう話がありました。小さいうちは女の子のほう
がおしゃまで、男の子をリードできるのかしら。
でも。しばらくしてから「今日もI君と遊ん



おさんぽのとき、手と手を
つなぐかは、一大關心事!

だ？」と聞いたら、圭は
「もう遊ばないよ。I君た
ら、まだ圭がI君のこと好
きだと思ってるんだから、
やんなっちゃう」だって。
こら!!

堀合先生に学ぶ(10)

核になる自分を大事にしていくこと

上垣内 伸子

冬の間、十文字幼稚園は、登園時間が十五分遅くなる。すみれ組（三歳児）の子どもたちは、暖かいコートをたっぷり着込んでゆっくりとやってくる。先生に手伝ってもらってコートを脱ぎ、お弁当をカバンから出して保温器にいれてもらうという、普段より時間がかかる朝の支度のひとときも、子どもたちにとっては、先生や友だちと過ごす気持ちのいい時間のように見える。朝から、このような、ゆったりと落ちついた雰囲気を感じるのには、保育室の中

で、それぞれの子どもたちが、気の合ういつもの何人かの友だちと一緒に、めあての遊びに取り組んでいるからだろうか。しょうじはとしひとと積み木のところで基地作りに余念がない。新聞紙のボールを転がして野球をするりょう、はやと、しょうた。そして、あやか、あかりたちは、机を囲んでいつもの製作に取り組んでいる……。少しずつ、一人ひとりの子どもたちの自分の居場所というのが出来てきたようにも見える。

そんなすみれ組の中で、どうもみちるだけは落ちつかない。居場所が見いだせないでいるように見える。困ったような、なんともさえない顔である。みちるは、入園当初はりきっていて、「あたしが、あたしが」と目だっていた子どもである。規制の枠が強いのか、「〇〇しちゃいけないだよ」という類の発言が多く、いざこざが起きることもあった。みちるは、初めから、片付け等の先生の指示には的確に従っていた。四月の初めの帰りの集まりの時に、「先生、かみしばいはしないの?」と聞いたこともある。入園前に、既に、いくつかの場所で、集団生活を経験してきており、それらから、教師主導の生活のイメージを持って幼稚園に入園してきたようであった。

みちるの様な子どもは、どの幼稚園にも見受けられる。ことばでの主張もはっきりとしており、指示を受けての行動も的確なので、「しっかりした子ども」と評価を受けることもある。けれども、そのよ

うな子どもの中に、言われたことへの対応は見事なのに、自分で好きなことをして過ごすとなると、なかなか見つけられずに困る子どももいるように思える。主体的に遊ぶことの経験不足であろうか。比較的自由で、自発的に遊ぶことが大切にされる幼稚園にあっては、そのようなことがある。現在のみちるの浮かない表情は、彼女のいまだ幼稚園のイメージと、すみれ組の生活にズレがあり、なかなか自分なりの活動を見いだせずにいることからくるようにも思える。

〈事例〉

みちるが、ホールで他の子どもたちが遊ぶ様子を見た後、保育室に戻ってくる。一緒にいることが多いりさが抱きついてきて、一緒にままごとコーナーのところへ行く。一緒にふざけようとするりさに応じず、机をベッドにして布団をかけて寝ようとするが、りさことしひとたちに場所

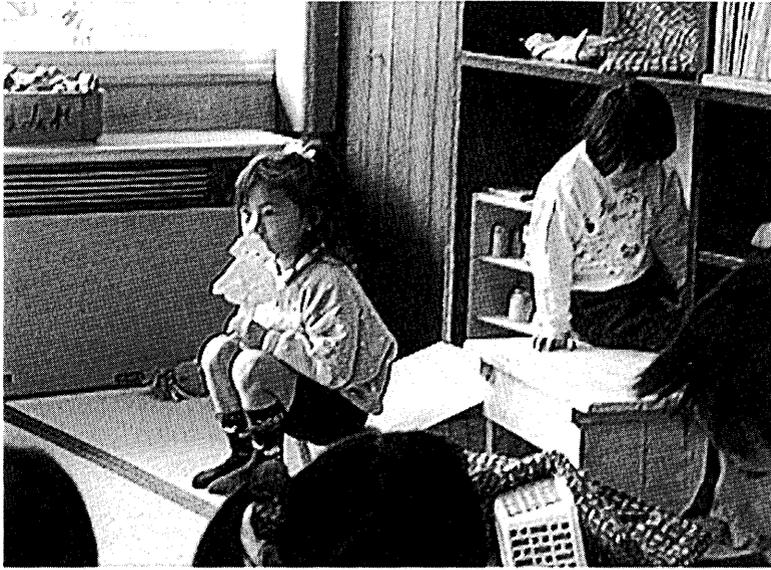
▼ 手きひざの間にはさんで……



の争いが起こってざわつくと、そこから離れて、他の子達が絵を描いている机に来てすわる。両手を机の下でひざの間にはさみ、前かがみになって、黙って他の子のすることを見ている。堀合先生は、その机のそばで、お面の紐を付けたら、子どもの求めに応じて絵を描いたりしておられる。

りさがやってきて、「ミンキーモモ！ ミンキーモモ！」と大声で叫んで先生に描いてくれるよう頼むと、みちるも「ミンキーモモ」と、りさに比べるとずいぶん遠慮がちに言う。そして、描いてもらうあいだ、ほおづえをついて待っている。やっとミンキーモモの絵を先生に描いてもらうと色を塗り始めるが、まわりを見て、すぐにはとりかかろうとしない。塗りかけて止めたりまた少し塗ったりと、一心に絵を描いたりしているまわりの子どもたちとは対照的である。りさが頼んだので自分も始めたが、どうもそれが本当に自分のしたいことではないような、そんな印象を受

◀ てきあがったけれど……



ける。

描き終えた子ども達はお面にしてもらったり、切りとってできあがったもので遊び始める。みちるも切りとるが、一人ぼつんと、ミンキーモモを持ってままごとコーナーにすわっている。園庭に出て行くが、しばらくして戻ってくると、保育室のまん中に一人ですわっている。その後、図書室で本を読んでいるりさこを見つけ、傍らでしばらく本をながめて過ごした。

この日は、あかりが、キリンの親子を描いて切り抜くと今度は遊ぶための公園を作っていたが、そのように、一つのところに腰を落ちつけ、じっくりと遊ぶ子ども達が多くみられた。それに対して、みちは腰が落ちつかない。絵を描いていても、終始目はきょろきょろとまわりに向けられている。かといって、何か面白そうなことがあれば何にでも頭をつっこんでやろうというのでもない。打ち込めない

のだ。それ故まわりのことが気になり、そしてそのためこれぞと集中して取り組むことが難しくなるという悪循環が生じている。みちるにとってはつらいことかもしれない。

子どもたちを観察していると、何かをする事に喜びを強く感じるような子どもと、どちらかというど、誰かと一緒にいることに楽しさを求める子どもとがいるように思えることがある。もとより、子どもを二つにタイプ分けできるわけではないし、どの子にも両方の要素があるであろう。また、この二つが並立して存在するものなのか、順序性を持って表れるものかも筆者にはまだよくわからない。観察から受ける印象でしかない。けれども、みちるを見ると、りさこと一緒に行動することで、居場所を見いだしたり楽しくなったりするように感じられる。このように、人への指向性が強い場合、その関係を気にするあまり、やりたい活動への取り組みが中途半端になったり、自分なりの活動の場が定まり

にくいということも生じるのではないだろうか。この日のみちるは、りさこと過ごすことを大事にするが、そこではどうも、自分のやりたいことが見つからないようである。

みちるは、堀合先生のことにも非常に意識している。目が先生を追っていることが多い。先生に伝えたいことも心の中にたくさん持っているのだろう。けれども、先生とつながりたいのに距離がなかなか縮まらない。堀合先生は、入園期の保育者のあり方について、「家庭の生活が少し広がったところにあるのが幼稚園で、家ではお母さんという頼れる人がいるけれど、幼稚園で過ごす間はお母さんがいない。そのかわりに先生という人がいて、この人に頼ればいいんだというように思ってもらえれば」と話されたことがある。けれども、みちるは幼稚園の先生をそのように認識していただろうか。幼稚園に対して既成のイメージを持っていただけように、先生に対しても何か行動をコントロールするような枠を持つ

ているのだろうか。また、この時期、堀合先生も、みちるに対して、お母さんの代わりを越えた、保育者としての成長に対する願いや援助があるのではないだろうか。

堀合先生が保育の中で大切にされていることは何だろうか。保育後の話し合いの中で繰り返し出てくるのは、「自分で考えて、自分で決めて、自分でやる」「頭も心も体も、自分の持っているものすべてを使って遊ぶ」ということばである。前者は、自発性・主体性、後者は能動性・全人性とでもいったらよいのだろうか。

この能動性、主体性ということこそ、みちるに対する願いに他ならない。先生は、自分で自分のやりたいことを見いだして欲しいという思いを抱いてみちるに接しておられるのではないだろうか。だからこそ安易な助け船は出てこない。みちるは、指示に従うことは得意なのに、堀合先生は指示もしない。

この日の保育後、みちるのことが話題になったとき、「核になる自分を大事にしていくことへの働きかけが重要なのではないか」と話された。また、「『いま』を大事にするだけでなく、将来どんな人間になってほしいのか、大人になったときどんな人間になりたいのか、そのことを考えて接したい」とも言われる。遊んであげること、その場合は楽しく過ごせるけれど、それがその子の成長につながっていくのか……。これは堀合先生の保育哲学につながることもある。遊んであげることが簡単だけれども、もっと大事に子どもの核になるような部分を育てていくには、それとは少し違う援助のありようが考えられるということなのだろう。

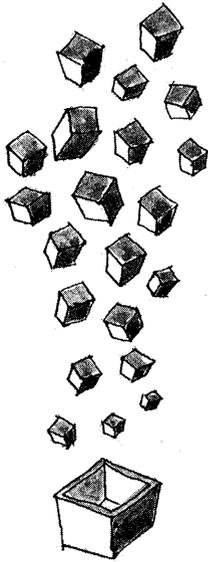
自由に遊ぶことを支えているのは、一人ひとりの主体性であり能動性であって、保育者には、活動を援助していくを通して、子どもの内面に働きかけ、活動を生み出す主体性・能動性を育てていくことが求められる。「自由とは厳しいものですね」と

筆者が問うと、「そうです。自由は厳しいですよ」という答が返ってきた。みちるは、これまでの育ちの中で、様々な規制を身につけてきたが故に、今、自由という海の上でアップアップしている。けれども、みちるは決して例外的な子どもではない。どの子どもも、多少の差はあれ、親や社会の要請を受けて育つ中で、同じ様な要素を持っていると考えられる。

二学期に、堀合先生は、これまでに培ってきた保

育者との信頼関係を基盤として、これからいよいよ保育が始まると話された。一人一人の子どもを理解し、それぞれに応じた援助を考えていくことであろう。保育場面における子どもを理解していく観点としてどのようなことがあげられるだろうか。

津守真先生は、「育つ」ということを、存在感・能動性・相互性・自我の四点に要約して考えるとしている。(*) 存在感とは、ここで、いま、自分が生きていることの安心感と充実感。能動性は、子ど



もの内側から発動して、その時に備わった力を使用しようとする生命的な活動であり、それは、外部からの力や他人の期待にこたえるのではなく、人の内側から生じるもの。相互性は、規則や約束を通しての相互関係と異なり、人と人が相手に応じて調節し合う生命的行為と述べている。

保育における存在感とは何だろうか。その場が自分の生活の場であり、これが自分のしたいことなただという決意が感じられるような存在の仕方だろうか。堀合先生が、日々の保育の中で大切にしておられることと相通じるものを感じる。

みちるの中にあるそうした自分なりの思いは見えないか。まだ生まれてきていないのか。この日の後半の観察で、みちるの中のこうして遊びたいというささやかな思いを感じることがあった。

〈事例〉

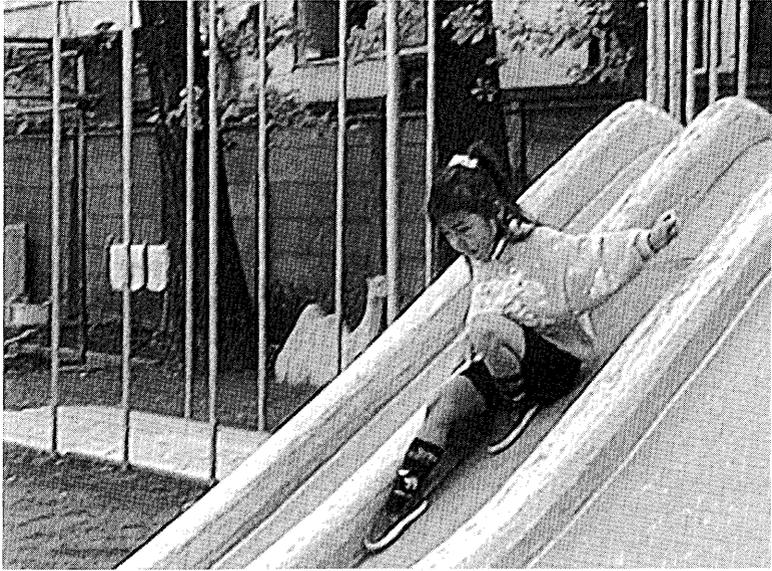
みちるは、園庭でウルトラマンごっこをしてい

るさとしたちをみつめる。一緒に遊びたい気持ちで、園庭に出て行くが、なかなか表現することが出来ない。伝えることが出来ない。りさこにつきあってみたりするがどうも満足できないように見える。ホールで遊ぶさとしたちを園庭からガラス越しに見たり、近づいたりするが、彼らには気が付いてもらえない。

みちるは、保育室に戻ってくると、今度は、「ウルトラの母」のお面を作り始めた。さとしたちは、ウルトラマンタロウ等、思い思いのお面をかぶって遊んでいるからだろう。色を塗ると、先生にゴムを付けてもらい、「お外行ってきまーす」と元氣よくでかけて行った。今日初めて見る笑顔である。いきおいよく出てみたものの、さとしたちは見つかからない。けれども、みちるは、そのお面を手に、晴れやかな表情で一人遊んだ。

片付けの時保育室に戻ってきたみちるは、堀合先生に、「きのうね……」と盛んに話しかけなが

▶ お外、行ってきまーす



ら、ままごと道具の片付けを手伝っていた。

お面を作って出て行くのは一つの自発的活動であり、みちる自身の工夫である。初めて見せてくれた笑顔が、何よりそれを語っている。結果として仲間には入れなかったけれど、ある種の満足感があったように思える。おそらく、このような、小さな小さな活動の積み重ねが、子どもを育てていくのだろう。時間のかかる小さな歩みだが、その変化を見守っていききたい。

(十文字学園女子短期大学)

(*) 津守真「乳幼児精神発達診断法」『別冊発達8
発達検査と発達援助』138～145P ミネルヴァ書房

一九八八年

編 集 後 記

明けましておめでとうございます

本年も「幼児の教育」をよろしく
お願い申し上げます

*

年も新たまり、新しい企画が始まりましたので、ご紹介いたします。
表紙絵は、梅田なほ先生に描いていただきました。これまでの本誌のイメージを打ち破るような腕白坊やモデルとか。一年間、どうぞよろしくお願いいたします。

新しい連載、「私の子ども時代」が始まります。第一回目の牛島義友先生をはじめ、人生の大先輩である

諸先生方の子ども時代を紹介していただくことにより、古き良き時代の子どもたちののびやかさ、子どもたちをとりまく環境、その時代の子どもの観などを感じとっていただければ、と思っております。

四月からは、昨年にひき続き、家庭教育シリーズ第二弾「子育てと夫婦の連携」(仮題)が始まります。

子育てに迷い、不安を感じるのには母親ならば誰しもですが、教育産業があふれ、情報のとび交う現代、夫婦の間での子育てに対する思いのズレが、迷いを大きくしているということはないでしょうか。男親と女親、お互いに理解し合っているのでしょうか。ひょっとしたら、理解し合えないのかもしれない。そんな事も含めて、夫婦の連携の問題を考えていきたいと思っております。(K)

幼 児 の 教 育

第九十三巻 第一号

(一九九四年一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成六年一月一日

編集兼発行人 本田 和子

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―二―

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六―一四―九

☎〇三―五三九五―六六〇四

振替口座 東京九―一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。



手づくり保育シリーズ①

歌ってだいすき —湯浅とんぼの 遊びうた傑作選—

子どもと保育者でつくるオリジナル歌遊び。保育の現場から生まれた遊びうた50曲に新しい遊びをつけ、替え歌をつけて、よりヴァリエティある生活を楽しめる曲集です。

湯浅とんぼ・著

B5判・104頁・定価2,200円(税込)



手づくり保育シリーズ②

布で作った アイデアおもちゃ

軍手、タオル、ストッキングなど身近にある布素材を使って作るおもちゃの作り方ガイドブック。子どもの好きな動物を子どもといっしょになって作り、遊ぶことができます。カラーページ多数

鈴木美也子・著

B5判・96頁・定価2,200円(税込)



手づくり保育シリーズ③

思い出プレゼント

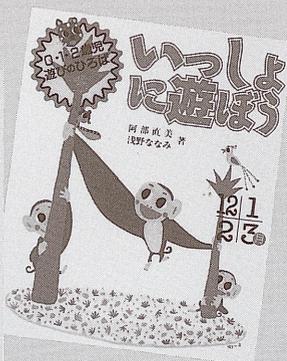
子どもたちが作った作品を、思い出いっぱいのプレゼントに手づくりしてあげます。友達同士のプレゼントや誕生日会のプレゼントなどのヒントにもなります。原寸大型紙付き。カラーページ多数

島田明美・著

B5判・96頁・定価2,200円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

0、1、2歳児遊びのひろば(全3巻)



1. いっしょに遊ぼう

4・5・6・7月

2. いっしょに遊ぼう

8・9・10・11月

3. いっしょに遊ぼう

12・1・2・3月

心身発達のはげしく変化する乳幼児期の遊び方と保育者・母親のかかわり方を紹介した保育資料。遊びの内容はオールカラーイラストで表現され分かりやすく現場ですぐ役立つ。赤ちゃん誕生、入園記念に最適。

阿部直美・浅野ななみ・共著

B5変型判・各60頁・定価各2,200円(税込)・セット定価6,600円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンターブックの
フレーベル館